
ルーズリーフと異世界を

星羅 琴音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルーズリーフと異世界を

【Zコード】

N4618Y

【作者名】

星羅 琴音

【あらすじ】

突然放り出された先は異世界！？しかも最悪なことに魔王と勇者の最終決戦チックなところで・・・何でもできるようになつた彼が異世界でしようとするのは・・・？

ルーズリーフと主人公な異世界メモコメディー

○話 放り出された。

突然だつた。

もうほんと唐突に。

なんでこんなこと云なつてゐるやうわいほりだ

簡単に言おう。

目の前には魔王っぽい人が傷だらけになりながらこちらのほうを指差し、後ろには勇者っぽい人が俺のほうに向かつて剣を持って走りこんできてる。なんで魔王と勇者だとわかるかというと、見た目恰好からしてもそうなのだけれど。

寸前まで叫びあつていた言葉がこうだ。

「せめて貴様だけは！喰らえ勇者！我が命！華麗に散らせてくれよ
う！！！極魔砲！」

そんでまあ。真中にいる俺に一瞬ボカンとした両者だつたがそれ以

降はよくわからん。なぜなら魔王（っぽい人）が放つた光の塊みたいなものが俺めがけて飛んできたからだつた。とつさに持つていた物で顔をかばうけど良く見てみると・・・

はい終わった。こんなもんで防げるわけないもん。

なんでこんなことになつたのやひ。俺はなんもしてないのに・・・。
。 そう思いながらつこせりあまでのことが真つ暗になつた俺の田
の前に浮かんできた。

○話 放り出された。（後書き）

ちょっと短めですが切り上げ

どうも星羅ヒトツノです 拙作ですがお付き合いしていただけたらと思いま
す ^ ^

1話 落ちついた。

なんてことはない生活だった。

何か明記できるような事をしてたわけでもないし、特技や何があるわけでもなかった。

今日も俺 松浦 龍は学校で移動教室の準備をしていた。

「おーい松浦ー早く行かねえと遅れちまつぞー。」

「おーひー今行くー。」

友達にも満足しているが深く付き合おうとも思ったこともない。不満はないが色々なことがつまらなかつた。そして移動教室に必要なもの、まあルーズリーフとか筆箱とかだが、それを持って席を立つた。

放り出された。

一瞬の間もなかつたのだ。席を立つた俺が瞬きをしたかどうかといふその時間で俺は変な所にいた。

後はそのままだ。魔王っぽい人の攻撃を受け、俺はお陀仏した。・ん?

「…………おい！」

誰かが俺の頬を叩いている。ん?」の声をつきまで聞いていたような・・・?

「おい!起きるよ!大ジョブか?!

目を覚ますとそこは勇者でした。

「じゃなくて……誰だ? 勇者っぽいひと?」は?

「まあ・・・落ちつけ、といつても無理か。状況は後で説明する。それよりも大丈夫か? 魔王の極魔砲を受けていたようだが・・・」

「ふう・・・すまん、取り乱した。」

勇者っぽいひとがゆづくり話しかけてきたおかげで少し落ち着いた。

・・・しかしこの状況・・・あれが、異世界トリップとかい「うやつ
か。・・・ふう。

ちなみに魔王のほうはいなくなつていた。

これはいい。（・・・・・）

つまらない人生には飽き飽きしていた。
せいぜい楽しませてもらおうか。勇者だか何だか知らないけど利用
させてもらおう。俺はまだまだ何も知らないからな。
こんなことを考える半面ビビッてる俺もいるのは確かに痛いと
ころだけど・・・。

「状況を説明する前に移動をさせてもらつてもいいかい？僕の仲間
がけがしててね。」

「む・・・ああ大丈夫だ。俺にけがはないようだしな。」

「そついえば君。どうして助かつたんだい？その本・・・かな？が
極魔砲の魔力をぜんぶすいとつていたようだけど・・・まあ、その
おかげで魔王は力尽きたみたいだし、僕たちは助けられたんだけど
ね。いきなり現れたこともあるし・・・色々聞きたいことが山ほど
あるよ あはは。とりあえずここを出て一番近くの村に行こうか。」

「ああ。わかった。・・・ツ！――！」

勇者の言葉にうなづき立ち上がろうとしたその瞬間、ルーズリーフ

が光りだした。

それはもう煌々と。そして光がおさまつむつ一度見てみると。
・・・何ともなってなかつた。

「・・・ゑ？」

思わず変な声を出してしまつた俺。

「いつたいなんだつたんだい？まさか魔王の魔力が暴走でもして・
・！」

「いや・・・そういうわけではなれどなんだけど・・・危険があるわけじゃないみたいだ。」

色々言つてゐる勇者をなだめて俺たちは勇者の仲間を連れて村へと向かつた。

・・・車がないというのはわかるが。俺には三日歩くといふのはなかなかの苦痛だつたところだけ言つておこう。

移動中に分かつたことが一つある。

ルーズリーフの最初のページに鉄のよつた光沢、しかし柔軟性のある良くなきわからぬページができていた。そこに書かれていたのは

『この本に書かれた』ことはすべて実行されます。契約者 《松浦

龍》』

本つていうかルーズリーフなんだけどな。しかしこれに書かれていることは気になるな。色々試してみたい。俺だってこの世界に魔法があるのを知つて少しづくわくしているのは否定できないからな。なかなか楽しくなってきたぞ。後は情報収集だ。

?????

意識を持つた。

何が起きたのかは私にはわかりませんけれど。

ただ。目の前の彼が私の主といつことだけ。
はつきりとわかった。

彼を見るとじらすじらす笑ってしまいそうな感覚に陥る。

ま、私 ルーズリーフなんですけどね

2話 移動そして村

村への移動中、勇者に俺がギリヤから異世界から飛ばされたからしいといふことを話すとこの世界のことを説明してくれた。
ちなみにルーズリーフのことについてはなるべく話さないようにしておつと決めた。面倒に巻き込まれるのは望ましくないからな。

勇者は自分のことの世界、そして魔王のことなどを教えてくれた。

この世界はいわゆる王道RPGチックな感じだ王国があり、村があり、魔物がいて、それを使役する魔族、そのトップの魔王。

世界のことから言つてこの世界は大きく区分すると4つ。騎士と武術の国、ギュランダル王国。魔術と調律の国リーンメルグラン皇国。生産と加工の国ドワーヴン自治領。各々 王国 皇国 自治領 といふ呼ばれ方をされており、それぞれが対立ということはせず助け合い、魔族に対抗していた。その魔族の国というか領土を魔域を呼んでいるらしい。

さらに街単位にギルドという物があり冒険者などのランク付けを行つたりしているらしく、ここに辺は俺も聞いたことのあるような異世界だった。

勇者は名前をリーグ＝ゲインハルメスといつてい。すらりとした180ちょっとの身長。いわゆるイケメンであり、金髪に・・・って言つていろいろするからやめる。近年になって問題が多くなつ

てきた魔物をとめるためには魔王を倒さないといけないというあたりの目的のために王国で開かれた武道大会に参加した騎士団小隊長であり、優勝者でもあつたらしい。仲間を集め、ようやく魔王城にたどり着き最終決戦を迎えて死闘を繰り広げ、そこで俺が出てくるひしい。

・・・うーん。何ともいえん。

勇者一行はこの後村に着いたら勇者は仲間の治療をすませ、王宮に行くところ。

「どうする？ リュウはこの後僕たちについてくるかい？ 君はみよりもないだろ？ し、この先生活が大変だろ。なにより国に行けば元の世界に変える方法が見つかるかもしね。」

「いや、いいよ。俺は俺でどうにかするぞ。それにあまり俺が異世界からきたと知られたくないしな。」

それに帰るつもりは毛頭ないしね。と心の中で付け加えておく。まあ知られたところはどうということではないかもしねけど、金持ちや貴族とか言つやつらのおもひをされたくないのが一番だ。

「ふむ・・・そうか。つとついたようだ。ここがアムル村だよ・・・とはいつてももう人も住んでないから僕たちのテントと廃屋があるだけなんだけどね。テントはあいてないかもしねけど廃屋はきれいどころを探して休むといいよ。君も疲れてるだろ？」

「ああ。 もうやめよう」

「明日の朝には出でつもじだから心変わりしたら話してくれ。 それと・・・はいこれ。」

と勇者にわたされた革袋には銀色のコイン、銅色のコイン、それに灰色の一〇センチくらいの棒が入っていた。

「この世界の通貨や。 この先色々あるだらうし、持ち物を何も持つてないだらう? 少ないが持つていってくれ。」

勇者は俺に王宮とは逆向きの先に人がいる村があることに通貨のことなど教えてくれたあとなかまのぼづくに向かった。

さて、俺も寝床を探して休みとするか。 色々いろいろてみたいこともあるしね。

主のお役に立ちたい。

???

そんなことばかりこの三日ほど掛けていました。

しかし私はしようせんモノであつ、話すことばを持ちません。

けれども、あの力を使って主の望みをかなえることはできるはずです。この世を捻じ曲げられるほど子の力で・・・。

そして私はページの最初に主へのメッセージを。

この本に書かれたことはすべて実行されます。

と。

3話 ルーズリーフと会話中なう。

ルーズリーフと会話中なう。

いや、嘘じゃないだ。

『どうかしましたか?』

「いや、何でもない。」

いつたん説明することにしよう。

~~~~~

勇者と別れた俺は村の中心にある広場から一番離れた民家に入った。  
少し汚い程度だったがまあ気にするまでもないだろう。

状況を整理しよう。俺は比較的きれいな椅子に座り、近くにあった  
テーブルに持つていてるものを見た。

所持品。ルーズリーフ（銀のページ付き） 筆箱：中身（シャープ  
ペン2本 芯30本入り3個 消しゴム2個 赤ペン2本 ボール  
ペン2本 ペンライト1本） 勇者の革財布（銀貨3枚 銅貨10  
枚 灰色棒（尖貨といふらしい）30本）。

服装 学生服

・・・少ないな。食料も勇者と別れた今ではどうするかも見当が付いていないし。

ちなみに通貨は尖貨10本で銅貨一枚 銅貨50枚で銀貨一枚 銀貨50枚で金貨一枚 だそうだ。

・・・そういえばルーズリーフに書いてあつたことを試していなかつたな。

そう思い俺は銀のページをめくつ書き込むことにした

「まあ、成功するかどうかはわからないが当面の目的の食糧だな。」

取りあえずだが書いてみないことには始まらないな。

ハンバーガーを手のひらに出す。

書いてみてシャープペンを置いた光とともにハンバーガーが出てきた。

これはいいな。本当にできるとま。

しかしいきなり出るのでは少々不便だな。やつぱり何か言葉にしてから出すという方法ができたほうがいいな。試してみるか。

・・・ん?なんか銀のページが光っていたよ。

早く試したい俺はそのことをいつたん置いておいてさつき書いたのを消して新たに書き換えた。

ハンバーガーを出すには「ハンバーガー」と唱える。

「よし、ハンバーガー。つと」

おお出できた。

しかし・・・この世界にハンバーガーがあるかどうか知らないけど、この味は間違いなく前の世界のハンバーガーだな。

これはいい。どうやらできることといつのは本当に制限がないよ。だな。

・・・?やはり何か光っているようだな。

銀のページが光っているのをはっきりとみたので開いてみる

『やつと気がついてくださいましたか、主。私はルーズリーフでござります。私が』

「なんだこれ。怖つ。」

『・・・』

俺の言葉に反応するようだ。一瞬光った銀のページは黙ったかのように書き変わった。

会話しているようだな・・・。

「すまない。ルーズリーフの・・・意思?それとも何か別のモノか・・?」

『「意思」ということであつてゐると思います。強大な力を感じたかと思つた時には私は私を自覚し、あなたが主であること。このちからでどのようなことでもできるということを知りました。』

強大な力・・・魔王のあの攻撃をルーズリーフで受けたからか・・?

「ふむ・・・。何かほかに分かることはないだろうか。」

『すみません。私には・・・。』

「そうか。」

聞かせるとなぜとんでもなかつたが色々試しつつ必要なものをいろいろしておこし揃はないだろ？。

~~~~~

こんな感じだらうな。

とつあえず俺は

元の世界にあったものは、名前をいい形を思い浮かべれば田の前に出せる。

と書き込み、私服、バッグなど移動に必要なものを出していった。
しかし・・・周りとの違いを考えれば、この世界にあった服装を探さないとな。

そつ思こつとも歸へなつてきた俺はつとつこへのだった。

とつとつと会話をすまうことができました。

？？？

怖がられてしましました。

まあ仕方ない」とだと思います。

・・・ええ。しようがございのです。ぐしゅ。

「ホン。これでじつが主の役立つかわづ。

主は寝てしまわれたようですね。

おやすみなさい。どうか寝てください。

4話 検証する。

「朝起きて外に出ると勇者」一行は旅立ちの準備をしていた。

「お、今君の所に行こうと思つてたんだ。僕たちはもう王国に戻るけど、君は本当に来なくともいいのかい？」

「ああ。色々試したいこともあるし。短い間だつたが世話になつた。」

「うふ。それじゃあね。よし出発だ！」

「ううして勇者は王国へと戻つていつた。いつかまた会うような気はする。・・・カンだ。」

俺は寝床へ戻りさっそく作業を開始した。

今の時点ではまあまあの村を出る前にルーズリーのことをできるだけ検証していく。

まあこれは大切なことだからな。いくら何でもとはいえ何か条件があつてもおかしくはない。これとこうときのフラグ折りつてやつだ。

「食料はだせる。生活に必須なものは大丈夫なはずだ。この世界に

合わせた服装は勇者一行にサイズが大体同じようなものをもらつたからいいとする。・・・あとはやはり身を守るものが必要だな。それに魔法を使ってみたいというのもあるしな。よし、ちょっとくらう試してみるか。

俺は筆記用具とルーズリーフを持つて外に出ることにした。

すこしあじこにこことになるだらう、ちょっとこの村を一回つしてからとこりのものいだらう。軽く概要を調べておくか。

この村は外周やく500メートルくらいの円形で、周りは1メートルくらいの石壁でできている。だがやはり魔王城に近いこともあってか住民は皆無。石壁も結構な部分が崩壊している見たいだ。中央に噴水のようなものがあるが倒壊。軽い広場になつていて。そこから十字に主要な道が各出口につながっている。

家はぜんぶで20もないな。鍛冶屋や武具屋が見受けられるのはやはりこれも魔物が出たりするからか。

・・・まあこんなところだらう。

俺は広場にあつた古びたベンチに座り、さっそく魔法を試してみることにした。

「うーむ・・・火とかだすとここの家ほとんど木造だから燃えてしまうな。水系でやってみるか。」

水つて実際にぶつけるだけじゃダメージつて実際どうなのだらうと思つたので水圧カッタをイメージして・・・と

水圧で水をレーザーのように出すには「ウォーターカッタ」といい手のひらを対象に向ける。

「よしこれでつと。言つだけじゃ何かあつた時の誤爆が怖いからな。対象は・・・噴水の残骸にしてみるか。ウォーターカッター！」

・・・ん？おかしいな。何も出ないぞ。

「ウォーターカッター！ウォーターカッター！・・・どうしたことだ？やはり何か条件があるのか？」

俺は検証のためファイアーボールやウインドカッターなどの聞いたことのあるような魔法を同様に試したがこれらも全くできない。と、色々試していると銀のページが光りつたので俺はそこを開いた。

『書かれたことができないようですが、私にもなぜだかよくわかりません。すみません。お役にたてず。』

「いや・・・それより何か思いつかないだろ？か。どうして食料やそのほかにも色々出すことはできたのに魔法が使えないという理由が。」

『考えられる条件はいくつありますね。一つは魔法というのです

から出すために魔力などといわれるものが必要であり、主はそれを持つていなければいけない。一つは主が実際に見たこと、感じたり、触つたりしたりしたものしか実行する「」とはできない。などが挙げられますね。』

うーむ・・・前者だつた場合はやばいな。何もできないということになる。

後者の可能性にかけて唯一見たことのある魔法、魔王が使つた極魔砲をやってみるか。

う。

極魔砲を使うには対象に手のひらを向けて「極魔砲」とい

・・・原理がわからないのでこつ書くしかなかつた。これでできなかつたら・・・いや、変な方向に考えるより、物は試しだ。

「残骸にむけて・・・極魔砲！」

力が集束し残骸に向けて放たれる！！ 成功だ。後者で正解だつたようだな。

砂埃が落ち着くとそこには大穴があいていた。

「・・・やりすぎた。」

威力が強いというのも考え方だ。ここは武器をとつてしまらぐ鍛えて、自己防衛くらいできるようにしてからじゃないといけない。

最初から大きな痛手だが、このくらい出ないと楽しめない。 そう思つた俺は武具屋に武器をあさつに行くことにした。

? ? ?

主がしようとすることを実行することができませんでした。

このルーズリーフー生の不覚であります。一生があるのかどうかはわかりませんが。

色々悩んでいる主に私が考へつる限りのことと進言すると何かができたようです。

主のお顔が輝きました。

そしてどこかへ駆けて行きました。 · · · 私を置いて。

· · · いいんです。主が楽しそうなので。 ぐすん。

5話 訓練、戦闘。それと顕現。

「こちひー・にひー・せんひー・・・・・

武器の訓練を始めてから約1週間。もともと俺の体は運動音痴ではなかつたらしく、テレビ、本や、パソコンがない世界の中することがなかつたのでひたすら素ぶり、筋トレを繰り返していた。

そのおかげか、俺の体はなかなか筋肉の付きで初めのころは木製の剣を素振りしていたが、2日前からは鉄製の剣に変えていた。

午前中いつぱい訓練した俺は、昼食をたべ、外へ気分転換に出ることにした。

最近はもっぱら銀のページを開いたルーズリーフを持ち歩いている。話し相手がほしいのだ。

「そろそろ外に出るときかな・・・王国とかほかの国へも行つてみたいな。」

と、門の付近へ歩いて行くと、近くの丘の方面から小柄な何かが歩いてくるのが見えた。

・・・?なんだろう?人・・・ではなさそうだが。

100mくらい今まで近づいてくるとそこいつの全貌が見えてきた。

人間の3分の2くらいの身長。緑色の皮膚。尖った耳。獸皮の服。そして手に持つた木製の棍棒。それはまるで・・・

「うー・ゴブリンか！？」

そう。ゲームなどによく見るゴブリンそっくりだった。

ゴブリンはこちらを見ると棍棒を振り上げ威嚇のように体を揺らした。

「くつー・いつかは戦闘しないといけないとは思っていたが・・・こんな早くに来たかッ！しかも小柄なりとも人型！」

俺は最近は腰につりあげるようになっていた剣を抜き放ちかまえるが、訓練しかしたことないし、勝てる自信もないが・・・

「やるしか・・・ないっ！」

走りこんできたゴブリンの棍棒を振り下ろすのを横に回避し、脇を切りつける！

体勢が悪かったので深くは入らず、それにこの剣はもともと置き去りにされていたものなのであまり切れ味はよくなく、わずかに切り傷を負わせただけだった。

しかし、ゴブリンは傷つけられて怒ったのか鼻息が荒くなり、ギイギイと鏽びた歯車がこすれあうような声を出しながら棍棒を振り回し

てぐる！

「くわつー堅いつー……うめりつー！」

横なぎの攻撃を後ろに下がってかわす。手足の短さでリーチが短かつたからかわすのは意外といけるが、腕力は相当高そうだ。当たつたら骨折してしまうんじゃないかなうつか。

再び上部からの振り下ろしを回避し、今度は力任せに肩を切りつける。

ザクツと鈍い音がして今度は紫色の体液が飛び散る。

棍棒を持っている側を切りつけたのでゴブリンはそれを落として肩を押さえている。

「どうだ！」

とゴブリンに向かって剣を構え、威嚇するゴブリンは下に落ちた

棍棒を逆の腕でひらこちらに投げつけてくるつー！

「……ぐふつ！？」

すさまじい腕力で投げられた棍棒は俺の右の腿をかすめていくがそれでも衝撃は半端じやなかつた。

膝をついて倒れてしまった俺に向かってゴブリンが雄たけびをあげ、突っ込んでこようとしている

！

？？？

大変大変大変です！

主が危険な状況になつているのがわかるのですがつーこうこうとき
にやくにたてないなんてつ！

助けなくては！

そう私は強く思い・・・そして・・・

危険を感じた俺は目を閉じてしまった。閉じてからそれが命取りになると気付いたが、もう遅い。

くるであろう衝撃を覚悟していたがその時閉じたはずの目にまばゆい光が差し込んできた。

・・・これはルーズリーフで何かしようとしたときに出る光に似ている・・・？

「 極魔砲！――！」

すさまじい音と光だった。

衝撃が收まり目を開けるとゴブリンは消えていた。

・・・俺の数M先の地面とともに。

声が聞こえてきた方向を見るとそこには女がいた。

身長は160ほど。すらりとした体格に、青い髪の毛。その色はま

るで。俺の使っていたルーズリーフに、そっくりだった。

「無事でござりますかっ！主！」

5話 訓練、戦闘。それと顕現。（後書き）

ついに初戦闘パート。
なかなか難しいですw。

8話 名前つけてみた。

「それで、いつの間にかこの姿になつてた・・・と。」

「その通りです主。」

あの後俺は女を連れ寝床へ戻つた。話を聞く限りではこいつはルーズリーフであるのは間違いないのだが、

「お前は願つたらなつたとこいつことだよな。極魔砲もうつしたことだし。」

「そうこうになりますね。私自身わかることも少ないので、この状態になつてできるこも多いくらいだと思います。主の役に立てますし。」

「

さつき見せてもうつたが普通にルーズリーフに戻れるといふことも確認した。

後気になることとこえば・・・

「そりいや、お前が人間の姿になつてるとこまでひやつて書き込むんだ? いちいちルーズリーフに戻るのか?」

「ああそれは……」のよう。」

と彼女は胸元で何かをつかむ動作をした……と思つたら手には一枚ページを持っていた。

ちなみに彼女の服装はフードの付いた脛が隠れるまでのローブだ。色は真っ白の地に薄い青で横線が等間隔に書かれている。このへんいかにもルーズリーフ。

・・・神の意志的なものに説明完了。

「ふむ。しかしつまでもお前や、ルーズリーフと呼ぶのもあれだな。名前とかないのか？もしくは自分で考えたりとかは。」

「あ・・・、差し出がましいのは重々承知しておりますが。・・・
あの、その・・・」

「なんだ。言いたい」とがあるのならばつきづきと言つとい。

「・・・はい。名前をつけていただけると光栄ですっ！…！」

ふむ。・・・名前か。うーむ・・・ルーズ・・・リーフ、葉・・・
青い髪だしな・・・

「あの・・・いやあれ? じぶんで・・・」

「青葉だ。」
あおば

「ふあう！？」

「青葉だつて。青い髪の毛にルーズリーフのリーフで葉。単純だけどな。気に入らないか?」

「いえ！ いえいえいえいえいえいえいえいえいえ！ …… ありがとうございます！」

心持ち顔が輝いてぽーつとしている青葉を見て何となくなごみ、俺は別の考えに移った。

あのレベルで今後も戦うことを考えると、もうと本格的に剣を修行しなければならない。

そもそも「」をでてどこかの国で剣も新たなのを見つけたり情報収集をしたりしないと・・・と考えていると、村の北側入り口のほうから人の叫び声が聞こえた。

青葉

主に前をいただいぢやいました。

わーいわーい。

コホン。私ともあらうものが少々興奮してしまいました。・・・え
へへ。

と喜びに浸つていると主が何かに気づき、とびだしてしまいました。
この青葉。主の役に立つて見せます！

意氣込んで私も主の後を追いかけるのでありました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4618y/>

ルーズリーフと異世界を

2011年11月19日21時14分発行